



# 少数民族の街に暮らして

狩野修二

「ハンゲンマルロマルスムハセヨ (韓国語でお話してください)」そう言われたのは、延吉市中心部にあるパートの日用品売り場である。

延吉市は中国の東北部、吉林省にある延辺朝鮮族自治州の州都であり、その人口の約半分が朝鮮族と呼ばれる少数民族で彼らの多くは中国語と朝鮮語のバイリンガルである。一九九二年の中韓国交正常化以降、(ほぼ)同一言語を話す同一民族が居住するこの地域へ韓国からの投資や留学が増加した。一方でこの地域から韓国へ一時的・長期的に出稼ぎに出る朝鮮族もかなりの数に上る。また歴史的な経緯や文法の類似性などから日本語を学習する朝鮮族も多く、日本への留学も多い。こうしたことから延吉は地方都市でありながらも意味外国・外国人



延吉市中心部。後方のガラス張の建物が冒頭で述べたデパート。(筆者撮影)

慣れた土地である。ただし在留日本人はそれほど多くないため、ここで外国人といえは多くは韓国人を指すことになる。

冒頭の台詞は、延吉に来て間もなく、掃除道具を探して店員に話しかけた際に言われた言葉である。つたない中国語で話すこの外国人を店員は何の躊躇もなく韓国人だと判断し朝鮮語で話しかけることに決めたのであった。

しかしこちらから話しかけない場合、見ただけで外国人と判断することは難しいようだ。韓国文化の流入や海外の情報がかれまで以上に得やすくなったことなどからか、比較的若い年齢層の人達は、見た目やファッションで中国人か韓国人かあるいは日本人かを見分けることはなかなか難しい。

ある時道を歩いていると、突然斜め前を歩いてきた二人組に「よかったら一緒に教会へ行きますか?」と朝鮮語で勧誘された。「朝鮮語はできません」と中国語で答えたところ「あ、漢語ですか」との返事が返ってきた。朝鮮語が話せないとなると、朝鮮族ではなく、韓国人でもない。ならば漢族であろう、という結論に達したのだらう。同じような事はその後も買物や何かの手続きの際などにたびたび発生した。もちろんもっと会話を続ければ外国人ということは簡単にわかってしまうのだけれど、こんなに日本人だと思われないことは今までなかったのでも新鮮な感じがした。

新鮮と言えは、どの国でもそうかもしれないが中国人はこちらが下手な中国語を話してもひとまず褒めてくれる。しかし朝鮮族の人

のお世辞は私がいままで聞いてきたものとはまたひと味違う。

ある時、州立図書館へ行き利用者登録をするため職員と話していると、「中国語が上手ですね」と聞き慣れたお世辞が相手から発せられた。「いえまだまだです」とこちらもいつものように応じると、その後に「私の中国語よりうまい」と付け加えた。このフレーズはなかなか新しいと感じたが、その後同じような台詞を別の人たちからも聞いたのでこの言い方はある種の決まり文句のようになっていたようだ。

この地域では朝鮮語で普通教育を高校まで受けることができ、そこに通えば生活のほとんどは朝鮮語で済ませることができる。もちろん大学に入学したり、就職したりすれば中国語を使う機会は断然多くなるので、彼らはかなり高いレベルで両言語をあやつるのだが、多くの人にとって中国語は第二言語となるため前述のような謙遜を含めた言い回しをするかもしれない。

さて、個人の目標は、朝鮮語で話しかけられたら朝鮮語で応じ、中国語で話しかけられ中国語で返せるようになることである。そして国籍不明だと思われたら嬉しい。しかしこの地域の人々が外国人と接したときにそれが日本人かもしれないと一瞬でも思わないとすると少し悲しい。なぜならそれは日本人の存在感がこの場所希薄であることを意味するからだ。延辺大学の日本語教育は中国国内でもトップレベルと言われており、実際日本に行ったこともないのに流暢に日本語を話す知り合いが何人もいる。また日本へ留学や仕事で行ったことがある知日派の人も多い。日本からの投資や交流が今後増加し、いつか冒頭の店で「韓国語か日本語でお話ください」と言われたらそれはそれで嬉しいに違いない。